銀河鉄道の夜

一、午后の授業

先生「では、皆さんはそういうふうに川だと云われたり、ミルクの流れたあとだと云われたとしていた、このぼんやりと白いものが本当はなにかご承知ですか」

先生は、黒板に吊るした大きな黒い星座の図の、白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから、四、五人手をあげました。

ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。

たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろは毎日教室でもねむく、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがするのでした。

先生「ジョバンニさん、あなたはわかっているのでしょう」

ジョバンニは勢いよく立ち上がりましたが、立ってみるともうはっきりとそれを答えることが出来ないのでした。

ザネリが前の席からふり返って、くすっと笑いました。

先生「では、カムパネルラさん」

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったまま、答えることが出来ませんでした。

先生「では、よし。このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、たくさんの小さな星に見えるのです」

ジョバンニは真っ赤になってうなずき、眼のなかには涙がいっぱいになりました。

ジョバンニ「そうだ、僕は知っていたのだ。それはいつか、カムパネルラのお父さんの博士のうちで、一緒に読んだ雑誌のなかにあったのだ。真っ黒なページいっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見た。
それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろ僕が朝にも午后にも仕事がつらく、みんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、気の毒がってわざと返事をしなかったのだ」

そう考えるとたまらないほど、自分もカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

先生「ですから、もしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星は、みんなその川のそこの砂や砂利の粒にもあたるわけです。太陽も地球もそのなかに浮かんでいる。つまりは、私どもも天の川の水の中に棲んでいるわけです。
その中の、さまざまの星については、もう時間ですからこの次にお話しましょう。

今日はその銀河のお祭りなのですから、みなさんは外へ出てよく空をごらんなさい。では、ここまでです。
起立、礼」

全員「さようなら」

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の何人かは家へ帰らずカムパネルラをまん中にして、校庭の隅に集まっていました。

それは今夜の星祭りに青いあかりをこしらえて、川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振って、どしどし学校の門を出て行きました。

町の家々では、いちいの葉の玉をつるしたり、ひのきの枝にあかりをつけたり、いろいろ支度をしているのでした。

家へ帰らず、ジョバンニは町を三つ曲がってある、大きな活版所にはいっていきました。

靴を脱いであがり、突き当りの扉をあけると、入り口から三番目に高いテーブルに座った人の所へ行ってお辞儀をしました。

その人は「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。

ジョバンニはその人の足元から一つの小さな平たい函をとり出して、電燈のたくさんついた壁の隅へしゃがみこむと、粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

工員「よう、虫めがね君、おはよう」

青い胸あてをした人がジョバンニの後ろを通りながらそう云いますと、近くの人たちが声もたてずこっちも向かずに冷たく笑いました。

ジョバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだん拾いました。

六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字を紙切れと引き合わせてから、さっきのテーブルの人へ持って行きました。

その人は黙ってそれを受け取って微かにうなずきました

そして、小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。

ジョバンニは威勢よくお辞儀をすると、鞄を持っておもてへ飛びだしました。

それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄って、パンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと、一目散に走りだしました。

三、ジョバンニの家

ジョバンニ「お母さん、いま帰ったよ。具合悪くなかったの」
母　「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね、わたしはずうっと具合がいいよ」
ジョバンニ「お母さん、今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って」
母　「お前、先におあがり。あたしはまだほしくないんだから」
ジョバンニ「姉さんはいつ帰ったの」
母　「ああ、三時ころ帰ったよ」
ジョバンニ「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。僕行ってとって来よう」
母　「あたしはゆっくりでいいんだから、お前さきにおあがり。姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行ったよ」

ジョバンニ「ねえ、お母さん。僕、お父さんはきっと間もなく帰ってくると思う。だって、今朝の新聞に北の方の漁はたいへん良かったと書いてあったよ」
母　「ああ、だけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない」

ジョバンニ「きっと出ているよ。お父さんが監獄に入るような悪いことをした筈がないんだ。この前、学校へ寄贈した大きな蟹の甲らだのトナカイの角だの、今だってみんな標本室にあるんだ」
母　「お父さんはこの次はお前にラッコの上着を持ってくると云ったねえ」
ジョバンニ「みんなが僕にあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。けれども、カムパネルラなんか決して云わない」
母　「あの人はうちのお父さんとはちょうどお前たちのように小さいときからのお友達だったそうだよ」
ジョバンニ「ああ、だからお父さんは僕をカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄った。アルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせると円くなって、それに電柱や信号標のあかりは汽車が通るときだけ、青くなるようになっていたんだ」
母　「そうだ、今晩は銀河のお祭りだねえ」
ジョバンニ「うん。みんなで烏瓜のあかりを川へ流しに行くんだって。牛乳をとりながらみてくるよ」

母　「ああ、行っておいで。川へは入らないでね」
ジョバンニ「僕、岸から見るだけなんだ。一時間で行ってくるよ」
母　「もっと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒なら心配はないから」
ジョバンニ「ああ。きっと一緒だよ」

ジョバンニ「では、一時間半で帰ってくるよ」

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、ヒノキのまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな街燈が、青白く立派に光って立っていました。

大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなり昼間のザネリが、新しいえりの尖ったシャツを着て、電燈の向こう側の暗い小路から出て来てひらっとジョバンニとすれ違いました。

ジョバンニ「ザネリ、烏瓜を流しに…」

ザネリ「ジョバンニ、お父さんからラッコの上着が来るよ」

ジョバンニはぱっと胸が冷たくなり、そこら中きぃんと鳴るように思いました。

ジョバンニ「何だい。ザネリ」

ジョバンニは高く叫び返しましたが、もうザネリは向こうのひばの植わった家の中に入っていきました。

ジョバンニ「ザネリはどうして僕が何にもしないのに、あんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。僕が何にもしないのにあんなことを言うのは、ザネリがばかだからだ」

ジョバンニは、せわしくいろいろなことを考えながら、さまざまな灯りや木の枝ですっかりきれいに飾られた街を通って行きました。

時計屋の店には明るくネオン燈がついて、円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニは我を忘れて、その星座の図に見入りました。

それは学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですが、やはりその真ん中には上から下にかけて、銀河がぼうとけむったような帯になって、その下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているようでした。

その後ろには、三本の脚のついた小さな望遠鏡が光って立っていました。また、いちばん後ろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっていました。

ジョバンニ「ほんとうにこんなサソリだの勇士だの、空にぎっしり居るだろうか。ああ、僕はその中をどこまでも歩いてみたい」

ジョバンニは窮屈な上着の肩を気にしながら、それでもわざと胸を張って大きく手を振って、町を通って行きました。

空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみな真っ青なもみや楢の枝で包まれ、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えました。

子どもらは、星めぐりの口笛を吹いたり、青いマグネシヤの花火を燃やしたりして、楽しそうに遊んでいるのでした。

けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるで違ったことを考えながら、牛乳屋のほうへ急ぐのでした。

ジョバンニ「今晩は。ごめんなさい」

老女「何かご用ですか」

ジョバンニ「あの、今日、牛乳が僕んとこに来なかったので、貰いにあがったんです」

老女「いま誰も居ないのでわかりません。明日にしてください」

ジョバンニ「おっかさんが病気なんです。今晩でないと困るんです」

老女「では、もう少したってから来てください」

ジョバンニ「そうですか、ではありがとう」

十字になった町のかどを曲がろうとしましたら、向こうの雑貨店の前で六、七人の生徒らが口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜のあかりを持ってやって来るのを見ました。

その笑い声も口笛も、みんな聞き覚えのあるものばかりでした。

ジョバンニ「川へ行くの」

同級生たち「ジョバンニ、ラッコの上着が来るよ」

ジョバンニは真っ赤になって急いで行きすぎようとしましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。

気の毒そうにだまって少しわらって、怒らないだろうかというように、ジョバンニの方を見ていました。

みんながてんでに口笛を吹き、向こうにぼんやり見える橋のほうへ歩いて行ってしまったあと、ジョバンニはなんとも云えずさびしくなって、いきなり走り出し黒い丘のほうへ急ぎました。

五、天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下にぼんやり普段よりも低く連なって見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼっていきました。

草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、さっきみんなの持って行った烏瓜のあかりのようだとも思いました。

まっ黒な、松や楢の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亙っているのが見え、また頂の天気輪の柱も見わけられたのでした。

つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめんに、夢の中からでも薫りだしたというように咲いていました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかする身体をつめたい草に投げました。

風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、汗でぬれたシャツもつめたく冷やされました。

ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞こえてきました。

その中にはたくさんの旅人が、林檎を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしていると考えますと、ジョバンニは何とも云えずかなしくなって、また眼をそらに挙げました。

ジョバンニ「ああ、あの白いそらの帯がみんな星だというぞ」

ジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなって、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引っ込んだりして、とうとう蕈のように長く延びるのを見ました。

すぐ眼の下のまちまでがぼんやりしたたくさんの星の集まりか、一つの大きなけむりかに見えるように思いました。

そしてジョバンニは、すぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように消えたりともったりしているのを見ました。

それはだんだんはっきりして、いま新しく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原にまっすぐにすきっと立ったのです。

「銀河ステーション、銀河ステーション」

どこかでふしぎな声がしたかと思うと、いきなり眼の前がぱっと明るくなりました。

まるで億万の蛍烏賊の火を空じゅうに沈めたという具合、またダイアモンド会社で隠しておいた金剛石をひっくり返してばら撒いたという風に、眼の前がさあっと明るくなって、ジョバンニは思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

ジョバンニは夜の鉄道の、黄いろの電燈のならんだ車室に窓から外を見ながら座っていたのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。

そしてその子供の肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だか分かりたくて、たまらなくなりました。

こっちも窓から顔を出そうとしたとき、その子供が頭を引っ込めて、こっちを見ました。

それは、カムパネルラだったのです。

ジョバンニ「カムパネルラ。きみは前からここにいたの」

カムパネルラ「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」

ジョバンニ「どこかで待っていようか」

カムパネルラ「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔色が青ざめて、どこか苦しいというふうでした。

するとジョバンニも、なんだかどこかに、なにか忘れたものがあるというような、おかしな気持ちがして黙っていました。

カムパネルラ「ああ、しまった。僕、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。僕、白鳥を見るのはほんとうに好きだ。川の遠くを飛んでいたって、僕はきっと見える」

そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図をしきりにぐるぐるまわして見ていました。

その地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤の上に、一々の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。

ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たように思いました。

ジョバンニ「この地図はどこで買ったの。黒曜石で出来てるねえ」

カムパネルラ「銀河ステーションでもらったんだ。君、もらわなかったの」

ジョバンニ「僕、銀河ステーションを通ったろうか。今、僕たちの居るとこ、ここだろう」

カムパネルラ「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが風にさらさら揺られて動いて、波を立てているのでした。

ジョバンニ「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」

ジョバンニは云いながら、まるではね上がりたいくらい愉快になって、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きました。

燐光の三角標が遠いものは小さく、近いものは大きく、或いは三角形、或いは四辺形、或いは稲妻や鎖の形、さまざまにならんで、野原のあっちにもこっちにも光っているのでした。

小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、どこまでもどこまでもと走って行くのでした。

ジョバンニ「僕はもうすっかり天の野原にきた。それにこの汽車、石炭をたいていないねぇ」

カムパネルラ「アルコールか電気だろう。あ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ」

ジョバンニ「僕、飛び下りて、あいつを取って、また飛び乗ってみせようか」

カムパネルラ「もうだめだ。あんなにうしろに行ってしまったから」

カムパネルラが、そう云ってしまわないうちに、次のりんどうの花が、いっぱいに光って過ぎて行きました。

たくさんのきいろな底をもった花のコップが、湧くように雨のように眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

七、鳥を捕る人

カムパネルラ「おっかさんは、僕をゆるして下さるだろうか。
僕はおっかさんがほんとうに幸せになるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことがいちばんの幸せなんだろう」
ジョバンニ「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」
カムパネルラ「僕わからない。誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸せなんだねえ。だから、おっかさんは僕をゆるして下さると思う」

鳥捕り「ここへかけてもようございますか」
ジョバンニ「ええ、いいんです」
鳥捕り「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか」
ジョバンニ「どこまでも行くんです」
鳥捕り「それはいいね。この汽車は、実際、どこまででも行きますぜ」
カムパネルラ「あなたはどこへ行くんです」

鳥捕り「わっしはすぐそこで降ります。鳥をつかまえる商売でね」
ジョバンニ「何鳥ですか」
鳥捕り「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」
ジョバンニ「鷺、どうしてとるんですか」
鳥捕り「そいつはわかり切ってまさあ。押し葉にするだけです」
ジョバンニ「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか」
鳥捕り「みんな食べるじゃありませんか」
カムパネルラ「おかしいねえ」
鳥捕り「おかしいも不審もありませんや。そら。
さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです」
ジョバンニ「本当に鷺だねえ」
鳥捕り「ね、そうでしょう」
ジョバンニ「鷺はおいしいんですか」
鳥捕り「ええ、毎日注文があります。しかし、雁の方がもっと売れます。
こっちはすぐ食べられます。どうです、少しおあがりなさい」

ジョバンニ「なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もっとおいしいけど、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。
けれども僕は、この人をばかにしながら、この人のお菓子を食べているのは、大へん気の毒だ」
カムパネルラ「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう」
鳥捕り「そうそう、ここで降りなきゃ」
ジョバンニ「どこへ行ったんだろう」

すると、向こうの席の人が、少し伸びあがるようにしながら、窓の外をのぞきました。

ジョバンニ「あすこへ行ってる。きっとまた鳥をつかまえるとこだねえ。」

その途端、桔梗いろのそらから、さっき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっぱいに舞いおりて来ました。

すると、あの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押さえて、布の袋の中に入れるのでした。

鷺は、蛍のように袋の中でしばらく青くぺかぺか光ったり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって眼をつぶるのでした。

鳥捕りは二十匹ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。

と思ったら、もうそこに鳥捕りの形はなくなって、

鳥捕り「ああ、せいせいした。どうも身体に丁度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな」

ジョバンニ「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか」

鳥捕り「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか」

鳥捕り「ああ、遠くからですね」

八、ジョバンニの切符

車掌「切符を拝見いたします」

三人の席の横に、赤い帽子をかぶった車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。

ジョバンニは、すっかりあわててしまって、上着のポケットにでも、入っていたかと思い、手を入れてみましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。

それは、四つに折ったはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。

車掌「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります」

それは、いちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもので、だまって見ていると、何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのでした。

鳥捕り「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこまででも行ける筈でさあ。あなた方、大したもんですね」

ジョバンニ「何だかわかりません」

ジョバンニはなんだかわけもわからずに、にわかに隣の鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。

鷺をつかまえてせいせいしたと喜んだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、人の切符をびっくりしたように横目で見てあわててほめだしたり。

そんなことを考えていると、この人のほんとうの幸せになるなら自分が天の川の河原に立って、百年つづけて鳥をとってやってもいいような気がして、どうしても黙っていられなくなりました。

ジョバンニ「ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか」

そう訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。

カムパネルラ「あのひとはどこへ行ったろう」

ジョバンニ「どこへ行ったろう。一体どこでまた会うのだろう。僕はどうして、も少しあの人に物を言わなかったろう」

カムパネルラ「ああ。僕もそう思っているよ」

ジョバンニ「僕はあの人が邪魔なような気がしたんだ」

カムパネルラ「何だか林檎の匂いがする。僕いま林檎のことを考えたためだろうか」

ジョバンニ「ほんとうに林檎の匂いだよ。それから野茨の匂いもする」

そしたら俄かにそこに、黒い洋服を着た青年が立っていました。

女の子「あら。ここはどこでしょう。まあ、きれいだわ」

青年の後ろには、十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が、黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

青年「ああ。ぼくたちはそらへ来たのだ。もうなんにも怖いことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。

そこならもうほんとうに明るくて匂いが良くて、立派な人たちでいっぱいです。

さあ、もうじきですから元気を出して、おもしろく歌って行きましょう」

カムパネルラ「どちらからいらっしゃったのですか。何かあったのですか」

青年「いえ、氷山にぶっつかって船が沈みましてね。こちらのお父さんが急な用で一足先に本国へお帰りになったので、あとから発ったのです。
わたくしは大学へはいっていて、家庭教師にやとわれていたのです。
ところが今日か昨日のあたりです。船が氷山にぶっつかって一ぺんに傾き沈みかけました。
霧が非常に深かったのです。ボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。
わたくしは必死となって、どうか小さな人を乗せてくださいと叫びました。
近くの人たちはすぐみちを開いてくれました。
けれども、ボートまでのところには、まだまだ小さな子どもたちや親なんか居て、とても押しのける勇気がなかったのです。
それでも、わたくしはどうしてもこの方をお助けするのが私の義務だと思い、前にいる子供らを押しのけようとしました。
けれどもまた、そんなにして助けてあげるよりはこのまま神の御前に行くほうが、ほんとうの幸福だとも思いました。
子供らばかりボートの中へはなしてやって、お母さんが狂気のようにキスを送り、お父さんがかなしいのをじっとこらえて真っすぐ立っているなど、とてももう腸もちぎれるようでした。

そのとき俄かに大きな音がしてわたくしたちは水に落ち、それからぼぅっとしたと思ったら、もうここへ来ていたのです。
ボートはきっと助かったに違いありません。何せ、よほど熟練な水夫たちが漕いですばやく舟から離れていましたから」

ジョバンニ「ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北の果ての海で、小さな船に乗って、誰かが一生けんめい働いている。僕はその人の幸いのためにいったいどうしたらいいのだろう」

なにが幸せかわからないです。
ほんとうにどんなつらいことでも、
それが正しいみちを進む中でのできごとなら、
峠の上りも下りも、
みんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。

ごとごとごとごと、汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。

向こうの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。
百や千もの大小さまざまの三角標。大きなものの上には、赤い点々をうった測量旗も見えました。

野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集まってぼうっと青白い霧のよう。

そこからかまたはもっと向こうからか、時々さまざまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。

乗客「いかがですか、こういう林檎ははじめてでしょう。まぁ、どうかおとり下さい」

向こうの席の人がいつか金と紅でうつくしくいろどられた大きな林檎を両手でかかえていました。

青年「おや、どっから来たのですか。立派ですねえ」
乗客「さあ、坊ちゃんがた、いかがですか。おとり下さい」

カムパネルラ「ありがとう」
ジョバンニ「ありがとう」

青年「どうも、ありがとう。どこで出来るのですか。こんな立派な林檎は」
乗客「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども、大抵ひとりでにいいものが出来るような約束になっております。自分の望む種子さえ播けばひとりでにどんどん出来ます。
けれども、あなたがたのいらっしゃる方なら農業はもうありません。
林檎だってお菓子だって、かすが少しもありませんから、みんなその人その人によって違ったわずかのいい香りになって、毛あなからちらけてしまうのです」

川下の向こう岸に青く茂った大きな林が見え、その枝には熟してまっ赤に光る円い実がいっぱい。

森の中からはオーケストラベルやジロフォンに混じってきれいな音色が、とけるように風につれて流れて来るのでした。

女の子「まあ。あのカラス」

カムパネルラ「カラスでない。みんな、かささぎだ」

カムパネルラ「あ、孔雀が居るよ」

女の子「ええ。たくさん居たわ」

カムパネルラ「そうだ、孔雀の声だってさっき聞こえた」

女の子「ええ。三十匹ぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞こえたのはみんな孔雀よ」

ジョバンニは俄かに何とも云えずかなしい気がして思わず、

ジョバンニ「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ」

とこわい顔をして云おうとしたぐらいでした。

川は二つにわかれました。

まっくらな島の真ん中に高いやぐらが一つ組まれて、その上に寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。

その人は青い旗を高く高くあげて、まるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りました。

すると空中にざあっと雨のような音がして、何かまっくらなものがいくかたまりも、鉄砲玉のように川の向こうへ飛んで行くのでした。

ジョバンニ「鳥が飛んで行くな」

女の子「まあ。この鳥、たくさんですわねえ。あらまあ、そらのきれいなこと」

女の子はジョバンニに話しかけましたけれども、ジョバンニはだまって口をむすんで、そらを見上げていました。

女の子「あの人、鳥へ教えてるんでしょうか」
カムパネルラ「わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう」

ジョバンニはもう頭を引っ込めたかったのですけれども、明るいとこへ顔を出すのがつらかったので、そのまま立って口笛を吹いていました。

ジョバンニ「どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもっとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうっと向こうに、まるでけむりのような小さな青い火が見える。
あれはほんとうに静かでつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをしずめるんだ
ああ。ほんとうにどこまでもどこまでも、僕といっしょに行く人はないだろうか。カムパネルラだって、あんな女の子とおもしろそうに話しているし、僕はほんとうにつらいなあ」

ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり、天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車は川から離れて崖の上を通るようになりました。

向こう岸もまた黒いいろの崖が岸を下流に下るにしたがって、だんだん高くなっていくのでした。

そして汽車はだんだん静かになって、小さな停車場にとまりました。

正面の青白い時計はかっきり第二時を示し、その振り子は風も無くなり汽車も動かず、しずかな野原の中にカチッカチッと正しく時を刻んで行くのでした。

そして、その振り子の音の絶え間を遠くの遠くの野原のはてから、かすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

全くもう車の中ではあの黒服の青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

ジョバンニ「こんなしずかないいとこで、僕はどうしてもっと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう」

ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして、窓の外を見つめていました。

すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

うしろの方で誰かが、いま眼がさめたという風ではきはき話している声がしました。

乗客「ええ、もうこの辺りから下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。

この傾斜があるもんですから、汽車は決して向こうからこっちへは来ないんです。

そら、もうだんだん早くなったでしょう」

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。

崖のはじに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。

ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなってきました。

汽車が小さな小屋の前を通って、その前にしょんぼり一人の子供が立ってこっちを見ている時などは思わずほうと叫びました。

どんどんどんどん汽車は走って行きました。

室中の人たちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら、腰掛けにしっかりしがみついていました。

ジョバンニは思わずカムパネルラと笑いました。

うすあかい河原なでしこの花があちこち咲いている中を、汽車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走っていました。

向こうとこっちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

ジョバンニ「あれ何の旗だろうねえ」

カムパネルラ「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ」

女の子「橋を架けるとこじゃないんでしょうか」

ジョバンニ「ああ、あれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ」

その時、向こう岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように高くはねあがり、どぉと烈しい音がしました。

カムパネルラ「発破だよ」

ジョバンニ「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕、こんな愉快な旅はしたことない」

カムパネルラ「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ。たくさんさかな居るんだな」

女の子「小さなお魚もいるんでしょうか」

ジョバンニ「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのも居るんでしょう。けれど遠くだから、いま小さいの見えなかったねえ」

ジョバンニはもうすっかり機嫌が直って面白そうに笑って、女の子に答えました。

川の向こう岸が俄かに赤くなりました。

九、サソリの火

楊の木や何もかもまっ黒にすかし出され、見えない天の川の波もちらちら針のように赤く光りました。

向こう岸の野原に大きなまっ赤な火が燃され、その黒いけむりは桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。

ルビーよりも赤くすきとおり、リチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。

ジョバンニ「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう」

カムパネルラ「蠍の火だな」

女の子「あら、蠍の火のことなら、あたし知ってるわ」

ジョバンニ「蠍の火って何だい」

女の子「蠍がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるって、あたし何べんもお父さんから聴いたわ」

ジョバンニ「蠍って虫だろう。僕、博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあって、それで刺されると死ぬって先生が云ったよ」

女の子「そうよ、だけどいい虫だわ。お父さんこう云ったのよ。

むかしのバルドラの野原に一ぴきの蠍がいて、小さな虫やなんかを殺して食べて生きていたんですって。

すると、ある日イタチに見つかって食べられそうになったんですって。蠍は一生けんめい逃げたけど、とうとうイタチに押さえられそうになって、そのときいきなり前に井戸があってその中に落ちてしまったわ。

もうどうしてもあがれないで、溺れはじめた蠍は斯う云ってお祈りしたというの」

サソリ「ああ、私はいままでいくつのものの命をとったか分からない。

そして、その私が今度イタチにとられようとしたときは、あんなに一生けんめい逃げた。それでもとうとうこんなになってしまった。

どうして私はわたしの身体をだまってイタチに呉れてやらなかったろう。

そしたらイタチも一日生きのびたろうに。

どうか神様、私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてず、どうかこの次にはまことのみんなの幸せのために私の身体をおつかい下さい」

女の子「そしたらいつか蠍は自分の身体がまっ赤なうつくしい火になって燃えて、
よるのやみを照らしているのを見たって。ほんとうにあの火それだわ」
カムパネルラ「そうだ。見たまえ、そこらの三角標はちょうど蠍の形にならんでいるよ」

ジョバンニはその大きな火の向こうに三つの三角標が、ちょうど蠍の腕のように、こっちに五つの三角標が尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。

そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしい蠍の火は、音なくあかるくあかるく燃えたのです。

青年「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をしてください」
ジョバンニ「僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ」
女の子「だけどあたしたち、もうここで降りなきゃいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから」
ジョバンニ「天上なんか行かなくたっていいじゃないか。僕たちここで天上よりももっといいとこをこさえなきゃいけないって、僕の先生が云ったよ」

女の子「だっておっかさんも行ってらっしゃるし、それに神さまが仰るんだわ」
ジョバンニ「そんな神さま、うその神さまだい」
女の子「あなたの神様、うその神様よ」
ジョバンニ「そうじゃないよ」
青年「あなたの神さまって、どんな神さまですか」
ジョバンニ「僕、ほんとうはよく知りません。けれどもそんなんでなしに、ほんとうにたった一人の神さまです」
青年「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」
ジョバンニ「そんなんでなしにたった一人のほんとうのほんとうの神さまです」
青年「わたくしはあなた方がいまに、そのほんとうの神さまにお会いになることを祈ります」

そのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架が川の中から立ってかがやき、その上には青白い雲がまるい環になって、後光のようにかかっているのでした。

そして、たくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになり、十字架の真向かいに行ってすっかりとまりました。

青年「さあ、下りるんですよ」

女の子「じゃ、さよなら」

ジョバンニ「さよなら」

ジョバンニ「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ。どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあの蠍のようにほんとうにみんなの幸せのためならば、僕の身体なんか百ぺん灼いてもかまわない」

カムパネルラ「うん。僕だってそうだ」

ジョバンニ「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう」

カムパネルラ「僕わからない」

ジョバンニ「僕たち、しっかりやろうねえ」

カムパネルラ「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」

ジョバンニはそっちを見てぎくっとしてしまいました。大きなまっくらな孔がどおんとあいているのです。

その底がどれほど深いかその奥に何があるか、いくら眼をこすってのぞいても何にも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。

ジョバンニ「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう」

カムパネルラ「ああ。きっと行くよ。あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集まってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あっ、あすこにいるの僕のお母さんだよ」

カムパネルラは遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそっちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかり、どうしてもカムパネルラが云ったように思えませんでした。

ジョバンニ「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ」

ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたら、そのいままでカムパネルラの座っていた席にもう形は見えず、ただ黒いびろうどばかり光っていました。

ジョバンニはまるで鉄砲玉のように立ち上がりました。

そして誰にも聞こえないように窓の外へ身体を乗り出して、力いっぱいはげしく打って叫び、それからもう咽喉いっぱい泣きだしました。

もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。

胸は何だかおかしく熱り、頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。

町はさっきの通りに下でたくさんの灯を綴ってはいましたが、その光はなんだかさっきよりは熱したという風でした。

ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱいに思いだされたのです。

黒い松の林の中を通って、それからほの白い牧場の柵をまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。

ジョバンニ「今晩は」

牛乳屋「はい、何のご用ですか」

ジョバンニ「今日、牛乳が僕のところへ来なかったのですが」

牛乳屋「あ、すみませんでした」

ジョバンニ「では、いただいて行きます」

ジョバンニはまだ熱い牛乳瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますと、十字になった町かどや店の前に女たちが集まって、橋の方を見ながら何かひそひそ話しているのです。

それから橋の上にもいろいろなあかりがいっぱいなのでした。

ジョバンニはなぜかさあっと胸が冷たくなったように思いました。

ジョバンニ「何かあったんですか」
町の人「こどもが水に落ちたんですよ」
ジョバンニは夢中で橋の方へ走りました。
橋の上は人でいっぱいで河が見えませんでした。
ジョバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原におりました。
その河原の水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。
いちばん下流の方に人の集まりがくっきりまっ黒に立っていました。
ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。
するとジョバンニはさっきカムパネルラと一緒だったマルソに会いました。

マルソ「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」
ジョバンニ「どうして、いつ」
マルソ「ザネリがね、舟の上から烏瓜のあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。
するとカムパネルラがすぐ飛びこんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」
ジョバンニ「みんな探してるんだろう」
マルソ「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つからないんだ」

ジョバンニはみんなの方へ行きました。
そこに町の人たちに囲まれて、青じろい尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんがまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじっと河を見ていました。

誰も一言も物を云う人もいませんでした。

ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかったのです。

俄かにカムパネルラのお父さんがきっぱり云いました。

博士「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」

ジョバンニは思わずかけよって、

ジョバンニ「僕はカムパネルラの行った方を知っています。僕はカムパネルラと一緒に歩いていたのです」

と云おうとしましたが、もう咽喉がつまって何とも云えませんでした。

博士「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとう」

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

博士「あなたのお父さんはもう帰っていますか」

ジョバンニ「いいえ」

博士「どうしたのかなあ。僕には一昨日、大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころだが、船が遅れたんだな。

ジョバンニさん、あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっぱいにうつった方へじっと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいで何にも云えずに、
博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを
知らせようと思うと、
もう一目散に河原を町の方へ走りました。

僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。
どこまでも一緒に進んで行こう。
どこまでも。どこまでも。